

# 『源氏物語』 宇治中の君の孤高性

——独詠歌「山里の松のかげにも」の解釈をめぐつて——

磯部 一美

## 一 はじめに

「源氏物語」「宇治十帖」の世界は、薫、匂宮という二人の主人公と、その執着の対象である宇治八の官家の大君、中の君、浮舟という三人の姫君を中心に繰り広げられる。しかし、薫との結婚を拒否し続け、自ら死を選び取った大君と、薫と匂宮の愛の狭間で苦しみ抜き、尼になった浮舟という二人の個性的な生き方に対して、匂宮の妻となり、京に迎えられ、世間からへ幸ひ人々と称される中の君は、その穏やかな生ゆえに今まで考察の対象となることは少なかった。とりわけ中の君自身の心情を凝縮させた詠歌についての考察はほぼ皆無に等しい状況である。

そこで本稿では、中の君の人生を考える上で最も重要と思われる、匂宮と六の君（夕霧右大臣女）の結婚の際に詠まれた中の君の独詠歌一首と、それを中心とした場面を取り上げる。匂宮の権門の女との結婚は、中の君自身予期していたこととはいえ、匂宮の愛情の衰退を現実たらしめる、それまでの人生の中で最も大きな事件であった。この和歌を含んだ場面に描かれた中の君の姿を丹念に読み解くことで、中の君がどのように造型されているのか、また宇治十帖において中の

君がどのような位置にあるのかを考えていきたい。

## 二 独詠歌「山里の松のかげにも」の解釈

この中の君の独詠の場面は、その直前に長大な心中思惟が語られる（本稿「三」（h）に引用）。心中思惟、すなわち中の君が悲嘆の中でさまざまに思いをめぐらせる場面は、この他にも早蕨巻巻頭に、また句宮と六の君の婚約の場面に見られるが、それら心中思惟の後、その心の中の思いを（声）として発するのはこの場面だけである。ここに詠まれた歌は、おそらく中の君が自らを慰めようと苦悶を繰り返した、その到達点にあるものと考えられる。（歌）それ自身と、その後の地の文（詞）から、まずはこの歌にどのような意味が込められているのかを確認しておきたい。

a. おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのほりて、夜更くるままによろづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとどかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおほえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

来し方忘れにけるにやあらむ。

〔宿木四〇四頁〕<sup>1)</sup>

句宮を六条院に奪い去られた中の君は、自らの心を慰めようと自問自答を繰り返す。そしてわずかながら冷静さを取り戻した時に、初めて十六夜の月が澄みのほっていることに気付くのであった。しかし、その月は「古今和歌集」の「わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」（卷十七・雑上／読人しらず）を思い起こさせ、今の絶望的にも思われる状況を中の君に再認識させる。松風の吹き通ってくる音は、宇治の山おろしに比べれば穏やかで、この二条院は「いとどかになつかしくめやすき御住まひ」には違いないものの、しかし今夜はとてもそうは思われない。中の君は、

その音を、少なくともあの山里の椎の葉の葉ずれよりは劣っている、と思うのである。「椎」は、『源氏物語』の中ではこの場合と、八の宮の死後、薫が八の宮を偲んで詠んだ次の歌に用例があるのみである。

b. 立ち寄らむ蔭とたのみし椎が本むなしき床になりけるかな

〔椎本二二二頁〕

この「椎の葉の音」について田中仁氏は、bとその引歌「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばそばし床にしあらねば」(宇津保物語<sup>(3)</sup>、嵯峨院)等から、「椎の葉の音」は宇治の暮しのすべてを一括して表わしていると解釈しなければならぬ理由はないとし、その時を、「宇治の暮らしの初めから終わりまですべてではなく、そのうちのある特定の時期、はつきり言えば八の宮の生前、その庇護の下に暮らしていた頃」と比定している<sup>(4)</sup>。とすると、中の君に今現在思い出されているのは、八の宮・大君・中の君の三人の宇治での暮らしということであり、ここでは宇治での暮らしを回想した、その延長として「山里の」の歌が詠まれているということになる。確かに、一般的にも「山里の松のかげ」は、宇治での侘しい暮らしを指していると言われている。と同時に、従来の注釈書では指摘されていないが、「松」には「待つ」が掛けられていると考えるべきであろう。田中氏はこの「松」について、次のように述べる。

もともと「山里の」の歌の方に、「椎」ではなくとりたてて「松」を用いた理由がある。「集成」が指摘するように、この「歌」は「秋」に「飽き」を響かせてある。しかしそれだけではない。「松」に「待つ」が懸けられているはずである。男女の仲にかかわる歌、しかも閨怨の歌に詠み込まれている「松」に「待つ」が懸けられていないとは考えられない。したがって、「山里の松の蔭」とは「宇治で句宮を待っていた頃」という意味になる。宇治で暮らしていた頃のうち、八の宮の没後、薫の企みによって句宮を受け入れてから二条院に移されるまでである。「宇治で暮らしていた頃」の始めから終わりまでではない。その中から句宮を待っていた頃を取り出すために、「松」は用いられたと考えられる。

この当否について、以下に検討を試みることにする。まずは、今までこの歌がどのように解釈されてきたのかについて

確認しておきたい。

〔評釈〕<sup>(5)</sup> あの宇治の山里の松のかけにも、こんなにまで身にしみる秋風はなかったことだ。

〔集成〕<sup>(6)</sup> 山里の松の木蔭住いでも、これほど身を切られるようにつらい秋風の吹くことはありませんでした。

「秋」に「飽き」を響かせる。

〔新大系〕<sup>(7)</sup> 宇治の山荘でもこれほど身にしみ秋風は経験したことがなかった。「秋」に「飽き」を掛ける。

〔新編全集〕 宇治の山里の松の陰の住いにも、これほど身にしみ悲しい秋風の吹くことはなかった。(頭注・宇

治の荒涼の自然に対比しながら、秋風の景に絶望的な心を託した歌。)

田中氏の言うように、恋の歌で「松」に「待つ」が掛けられていないとは、本来ならばまず考えられないところである。にもかかわらず、諸注釈があえて無視する理由は、中の君の嘆きをすべてへ宇治での暮らしと一括りに考えるからであろう。つまり、「椎の葉の音」「山里の松のかけ」「来し方」をすべて一括りにへ宇治での暮らしと考える場合、恋人を「待つ」という意味での「松」をここに含めると、「山里の松のかけ」の時期が限定されてしまい、歌が地の文である「椎の葉の音」「来し方」と齟齬を来してしまうのである。とは言うものの、ここに「待つ」が掛けられていないとは、やはり考えにくいであろう。

ところで、歌に「待つ」の意を読み取る条件として、以下の三点があげられる。①「山里」とある以上それは「宇治」でなくてはならず、また「秋の風」とある以上、季節は「秋」に限定されなければならない。②中の君の嘆きは、「山里の松のかけにもかくばかり……」と、現在の「身にしみ」状況と比較されている。おそらく「待つ」状況であったその時期は、現在よりひどくはないものの、同等に近い嘆きとして受け取られていたはずである。③この歌には、「秋の風」に「飽きの風」が掛けられている。つまり、現在は、あの時よりもっと飽きられていると解釈せねばならず、言い換えれば、その時既に「飽きられていた」という意識があつたと考えなければならぬ。

そこです、①から見ていくことにしたい。中の君と匂宮の結婚は、今現在（八月十六日）を起点として、昨年八月二十八日「総角二六二頁」である。よつて「秋」とはそれ以降、匂宮を待つていた頃を指している。二人の結婚の後、匂宮が宇治を訪問するのは結婚の三日間を除いて合計三回である。一回目は九月十日頃、匂宮が一人では決めかねていた宇治行きを、薫の助言によつて、ともに訪れるという場面。しかし、その時の中の君の様子はほとんど語られず、ただ翌朝匂宮が「中納言の、主方に心のどかなる気色こそうらやましけれ」「総角二八九頁」と言うのを、訝しく思つて聞いていたとあるのみである。二回目は十月一日頃、やはり薫の計画で、今度は宇治に紅葉狩りに行くという場面。しかしこの忍びの旅行は、すぐに母・明石中宮の知れるところとなり、大勢の従者が宇治に差し向けられ、匂宮は身動きが取れず、中の君のもとへは立ち寄らずに帰京する。三回目は十二月、大君を失つた中の君の悲しみを思うと居ても立ってもいられず、雪を冒して弔問に訪れるという場面。しかしこれは真冬のことであり、「秋」とは無関係である。このように見ていくと計三回の訪問のうち、考えられるとすれば、やはり二回目の紅葉狩りの一件ということにならう。

続いて②であるが、この「紅葉狩り」は十月のことであり、既に冬に入っている。しかし、薫の「紅葉御覽すべく」「総角二九二頁」の大義名分としては、おそらく諸注釈の引く、「後撰和歌集」の「宇治山の紅葉を見ずは長月の過ぎゆくひをも知らずぞあらまし」（巻七・秋下／長月のつごもりの日、紅葉に氷魚をつけておこせて侍りければ／千兼がむすめ）が念頭にあつたと思われる。また、「紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに」「総角二九三頁」、「紅葉を薄く濃くかざして」「同」とことさらに「紅葉狩り」であることが強調されている点からも、人々は、この季節を「冬」ではなく、「秋」あるいは「秋の終わり」と認識していたのではないかと考えられる。この紅葉狩りは、匂宮が中の君のもとを訪れるべく薫によつて画策されたもので、薫は「論なく中宿したまはむを、さるべきさまに思せ」「総角二九二頁」と食料などの必要な物品、人員までも送り込んで大君・中の君に期待を抱かせたのであつた。しかし結局は、このような軽率な行動が後の世の例となつてはと危惧する明石中宮の命で、衛門督が大勢の殿上人を引き連れてやつて来たため、事が大仰になり、

匂宮は姫君たちのもとへは立ち寄ることができず、無念のうちに帰京したのであった。この一行の帰京の様子に中の君は、次のような感慨を催している。

c. 数ならぬありさまにては、めでたき御あたりにもじらはむ、かひなきわざかなといとど思し知りたまふ。よそにて隔てたる月日は、おほつかなさもことわりに、さりとともなど慰めたまふを、近きほどにのしりおはして、つれなく過ぎたまふなむ、つらくも口惜しくも思ひ乱れたまふ。

〔総角二九五頁〕

中の君の「数ならぬありさま」という実感は、華々しい匂宮の一行を目の当たりにすることで現実のものとなる。人数でもない我が身の上では、貴人と付き合うのも甲斐のないことであつたとつくづく思い知らされた中の君は、眼前の華麗な世界に、それまで辛うじて保つていた誇りさえも打ち碎かれるのである。<sup>(9)</sup>と同時に、もし遠く離れたままで月日が経つのであれば、それはそれで諦められようものをと恨めしく残念に感じるのであるが、しかしこの一件は、匂宮が六の君と結婚する直前の場面で、薫に「かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおほえはべるを、忍びて渡させたまひてんや」〔宿木三九七―三九八頁〕と依頼するように、宇治帰郷をことさらに願う中の君の心情が、実はそのまま匂宮と円満な夫婦関係を継続させたいが故であることと一致する。つまり中の君は、都において気苦労が絶えない辛い毎日を送るよりも、宇治にいれば、たとえ毎日は逢えなくても、それはそれで、いつまでも期待をもつて待ち続けられると考えるのである。この「よそにて隔てたる月日は、おほつかなさもことわりに、さりとともなど慰めたまふ」という心情表現は、都における宇治帰郷の念と同じ発想であるという点で、「紅葉狩り」の場面における中の君の悲嘆の深さが読み取れよう。

ところで、匂宮は帰京の際に人々との唱和の中で、次のような歌を詠んでいる。

d. 秋はててさびしさまざる木のもとを吹きなすくしそ峰の松風

とて、いといたく涙ぐみたまへるを、ほのかに知る人は、げに深く思すなりけり。今日のたよりを過ぐしたまふ心苦しき、と見たてまつる人あれど、ことごとしくひきつづきて、えおはしまし寄らず。

〔総角二九七頁〕

歌の部分を現代語訳するならば、『秋が去って、ひとしお寂しさがまさってくるこの山里の—あの人のもとを—あまり強く吹きすさんでくれるな、峰の松風よ』となる。この歌は、一見紅葉狩りの遊宴の唱和の体裁を取りながら、一方でそれは誰にも語ることでできない心情の告白であり、また形は唱和ではあるものの、独詠の要素を多分に含んでいる。「秋」「松」「風」と、中の君の歌との共通点も多く、時間、場所ともに違うが、中の君の独詠歌と並べてみるなら、あたかも贈答であるかのような感は否めまい。この歌が中の君のもとに届いていたかはともかく、むしろここでは、「峰（を渡る）松風」がこの時の印象的な一風景として語られていることに注目したい。つまり句宮は、同じ宇治の、故八の宮邸のすぐ近くに在って、中の君を想い、おそらくは今自分のいるところと同様に吹きすさんでいるであろう「松風」に呼びかけているのである。悲嘆に沈む中の君にとつても、この吹き渡る「松風」はその心象風景そのままに、やはり印象的な一風景として心に残つたに違いない。したがって、この「松風」には、あの「山里の松のかげ」が重ね合わされている可能性が高いであろう。

最後に③であるが、結論からいえば、中の君が「飽きられている」という思い、不安は絶えずあつたと思われる。しかしそれは極めて主観的であり、その実態とは必ずしも一致しない。句宮の愛情を疑いながら、否、そんなことはないと否定する、その揺れる心情は、宇治在住時に限らずさまざまな場面で見ることができ。

e.（※句宮は）「思ひながらのとだえあらむを、いかなることにかと思すな。夢にてもおろかならむに……」といと深く聞こえたまへど、（※中の君は）絶え間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心のほどしるきにやと心おかれて、わが御ありさまから、さまざまもの嘆かしくてなむありける。

〔総角二八一〜二八二頁〕

結婚三日目の夜、幾度も夜離れの我からでないことを訴える句宮に対して、そこまで言うのは噂に聞く浮気症のせいではないかと疑う場面である。後には信じて待ち続けようと心情が変化するものの、しかしその愛情を信じきることのできない中の君の姿は、既にこの結婚の時点で見られるものである。

f. 正身は、たまさかに対面したまふ時、(※句宮が) 限りなく深きことを頼め契りたまへれば、さりともこよなうは思し変らじと、おぼつかなきもわりなき障りこそはものしたまふらめと心の中に思ひ慰めたまふ方あり。

〔総角二九九頁〕

問題にしている紅葉狩りの場面である。中の君が、宴が果てて帰京していく句宮に対して、そのまま素通りして帰ってしまうことを恨み嘆くのであるが、それでもあんなに堅くお約束下さったのだから、いくら何でもすつかり心変わりしてしまふことはあるまいと己が心を慰める。しかしその様子は、信じているというよりは、信じたいといった気持ちの方が強く働いている。

g. さればよ、いかでかは、数ならぬありさまなれば、かならず人笑へにうきこと出で来んものぞとは、思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし、あだなる御心と聞きしわたりを、頼もしげなく思ひながら、目に近くては、ことにつらげなることも見えず、あはれに深き契りをのみしたまへるを、にはかに変りたまはんほど、いかがは安き心地はすべからむ……。

〔宿木三八三頁〕

二月初旬に上京し、二条院での生活にやつと慣れてきた夏の頃、句宮と夕霧の六の君との婚約が決まる。ここは、それが中の君の耳に届いたという場面である。「さればよ」とは、あの紅葉狩りの一件で「数ならぬありさま」を痛感していた中の君にとって、まさに来るべき日がきた、という思いであつただろう。現在の寵愛、深い契りの言葉の数々にその愛情の程は十分感じていながらも、しかし「にはかに変りたまはんほど」との不安は募るばかりである。

以上のことから、中の君の句宮の愛情への不安が、最初から消えることなく、絶えず続いているものであることが理解できよう。つまり、中の君の句宮への思いの根底には、絶えず顧みられなくなることへの不安があるのである。したがって、「山里の松のかけにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき」とは、fの場面の、飽きられていると感じつても信じようとして信じていることができた、あの「秋」の日が重ね合わされていると見ることでできよう。



今をときめく今上帝の第三皇子と零落した宮家の身寄りのない姫君。厳しい現実の中で、二人の仲を唯一つなぎとめるものは匂宮の愛情でしかないことを、中の君は本能的に理解している。紅葉狩りの一件は、匂宮との関係の中で最初に直面した「現実」であり、中の君の不安を現実たらしめる大きな「事件」だったのである。

結論としては、田中氏の言うように、中の君の独詠歌「山里の松のかけにも」の「松」には「待つ」がかけられており、それは同時に宇治の山里で匂宮を待っていた頃ということができよう。そしてさらに限定するなら、それはあの紅葉狩りの一件のことを指しているのである。よってこの歌は次のように解釈されることになる。

山里の松のかけで、あの人を待っていたあの時でさえ、こんなに身にしみてつらい秋の風は吹いてこなかった。(紅葉狩りの際につれなく帰ってしまわれたあの時も、飽きられているのかとは薄々思いながらも、それでも信じて待つことができたのだった。しかし今夜の風は本当に飽きられたのだと実感させられて、あの時よりもずっと身に染みて、辛く感じられる秋の風であることよ。)

### 三 中の君の孤独を照射するもの

(1) 「椎の葉の音」と「松風の吹き来る音」

振り返ってみれば、この「紅葉狩り」の一件は、中の君にとつてだけではなく、大君にとつても、ひいては「物語」にとつても一つの転機となる大きな事件であった。すなわち、訪問が中止されたことで姉・大君は(その期待の大ききさゆえに)薫・匂宮への不信感をますます強め、その男性不信をいっそう強固にし、やがて死へと至る直接の原因となったのである。中の君が匂宮を待っていた「時間」とは、そのまま大君の体調不良、病状の悪化とも相俟って、想像を絶する悲しみと苦しみ、そして孤独の時間でもあったはずである。

さて、この独詠歌「山里の松のかげにも」が「紅葉狩り」の一件を指していると考えた場合、その前の地の文はどのように解釈されるべきであろうか。

(a) おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのほりて、夜更くるままによろづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとどかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおほえず、榎の葉の音には劣りて思ほゆ。  
〔宿木四〇四頁〕

「榎」の用例は、前述したように「源氏物語」中にはこの歌を含めて二首あるのみである。今一首は、薫の（本稿）「(b) に引用」 「立ち奇らむ蔭とたのみし榎が本むなしき床になりけるかな」 「榎本二二二頁」であるが、一見して分かるように、(b) の歌に見える「榎」は八の宮自身を指しており、(a) の場面で思い起こされているのもまた宇治八の宮とみて間違いないであろう。そして、この「榎の葉の音」に比較されるのが「松風の吹き来る音」なのであった。

「松風の吹きくる音」は直接的には、「いとどかにめやすき御住まひ」つまり二条院を指している。従来の注釈書では、「まだ宇治の邸のほうが良かったです」と否定的に解釈するものが多いが、それは中の君の嘆きの果てに両者（宇治八の宮邸と二条院）が比較されていると理解しているからであろう。しかし、二条院はたしかに「いとどかにめやすき御住まひ」と中の君には映っているのであって、彼女は確かに二条院での暮らしを結構なものと感じているのである。ここは「二条院よりもまだ宇治の邸の方がいい」のではなく、「二条院もいけれど、でも今夜は宇治の邸の方がいい」と肯定的に解釈されるべきであろう。つまり中の君は、現在を過去の一苦労しかった時期と比較することで、その苦しみを相殺しようと懸命に試みているのである。「榎の葉の音」とは、「紅葉狩り」の一件を含め、それ以来二条院に転居するまで、宇治で独り句宮を待ち続けていた頃を指していると考えられる。

(2) 語り手の評言と女房たち

ところで、このように嘆きの淵に沈む中の君に対し、語り手は「来し方忘れにけるにやあらむ」と訝しむ。しかし、過去のことは忘れてしまったのでしようか」というこの評言には疑問を抱かざるを得ない。なぜなら、地の文と歌に凝縮された「心情」は、今まで見てきた通り、その「過去」と密接にかかわっていたからである。またこのことは、その前に続く長大な心中思惟によっても明らかである。ここに、その心中思惟の部分を引いておく。

h. 幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人一ところを頼みきこえさせて、さる山里に年経しかど、いつとなくつれづれにすこくありながら、いとかく心にしみて世をうきものとも思はざりしに、うちつづきあさましき御事どもを思ひしほどは、世にまたとまりて片時経べくもおほえず、恋しく悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたりしほどよりは、人にもなるやうなるありさまを、長かるべきこととは思はねど、見るかぎりは憎げなき御心ばえもてなしなるにやうやう思ふこと薄らぎてありつるを、このふしの身のうさ、はた、言はん方なく、限りとおほゆるわざなりけり、ひたすら世に亡くなりたまひにし人々よりは、さりととも、これは、時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見棄てて出でたまふつらさ、来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに……。

〔宿木四〇三―四〇四頁〕

傍線部が宇治での暮らしを回想している部分である。「幼きほどより」と、中の君はまず自らの幼い時分を思い出す。続いて、父宮と姉君の死を思い、その悲しみを現状と比較する。つまり中の君は、自らの不幸な人生体験を振り返ることで現在の悲しみを相対化し、その心を慰めようとするのである。最初にも述べたが、このような自問自答を繰り返す中で、中の君は少しずつ落ち着きを取り戻していったのであった。「姨捨山の月」も、「松風の吹き来る音」も、そうした冷静さの中に、やっと取り戻した「感覚」であり、それゆえに、また一層荒涼とした心象風景を照らし出すものでもあったといえよう。しかし、やはりここには語り手の言う「来し方忘れにける」中の君の姿は見えない。むしろ、過去を総括するこ

とで、現在の苦境に懸命に対処しようとする健気さだけが際立ってくるのである。「過去のことは忘れてしまったというのでしようか……?」この問いはむしろ、読者である我々に向けて発せられた言葉である。そしてそれは、おそらく、中の君は決して過去を忘れてはいない、ということについての注意を我々に喚起することで、それに続く女房たちの言葉に注意を促しているのである。

嘆きに沈む中の君に対し、女房たちは次のように話しかける。

i. 老人どもなど、「今は入ませたまひね。月見るは忌みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかにならせたまはん。あな見苦しや。ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく」とうち嘆きて、「いでこの御事よ。さりとも、かうて、おろかにはよもなりはてさせたまはじ。さ言へど、もとの心

ざし深く思ひそめつる仲は、なごりなからぬものぞ」など言ひあへるも……。

〔宿木四〇四、四〇五頁〕

眼前の月にさえ慰められず、むしろいつそう悲嘆を深めてゆく中の君に対して、無遠慮に思うままを述べ立てる老女房たちは、中の君の心情をまったく理解していない。また、懐妊に加えてこの度の一件で食の進まない中の君に、食を断つようにして亡くなった姉・大君を「ゆゆしう思ひ出でらるること」と引き合いに出し、「いとこそわりなく」と嘆息を漏らす。同じ「来し方」を共有し、さらには中の君以上に主人として崇めてきたであろう大君を「ゆゆし」と忌む老女房たちは、懐かしく、慕わしく大君を思い起こしている中の君の反発をいよいよ強めていく。また、この一件を同情的に話し合う女房の声も、中の君にはやはり煩わしい。「さまざまに聞きにくく、今は、いかにもいかにもかけては言はざらなむ、ただにこそ見ぬ」〔宿木四〇五頁〕と、周囲の声にさらに拒絶の度を深めていく中の君に、語り手は「こでもう一度、我ひとり恨みきこえんとにやあらむ」〔宿木四〇五頁〕と推量する。この、「ご自分お一人で恨み通そうというのでしようかと心中を慮る語り口は、「来し方忘れにけるにやあらむ」と同様に、わたしに構わないで」という悲痛なまでの中の君の叫びを浮き彫りにしている。女房たちの現実的な「声」は、それに取り囲まれるようにしてある中の君の孤独を、より一

層強めるものとして機能しているのである。

(3) 象徴としての月

本稿で取り上げた「匂宮と六の君の結婚」における中の君の独詠の場面は、今まで見てきたように、中の君の独詠歌を中心に据えて、その嘆きと孤独な内面を執拗なまでに描き出している。女房たちは、中の君と同じ「来し方」を共有しながら、しかしそれを「否定」することで、この「現実」を生きようとする。一方中の君自身は、「来し方」を「肯定」することで、この「現実」を生き抜こうとするのである。この対照的な両者の「来し方」は、共有されているようで、実は共有されていないという、各々の隔絶した心情を鮮明に描き出している。そしてそれは、この場面に点描される「月」にも同様のことが言えるであろう。

j. (※夕霧) 十六夜の月やうやうさし上がるまで心もとなければ、いとしも(※匂宮の)御心入らぬことにて……。

[宿木四〇一頁]

k. (※夕霧) 大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな。

l. (※匂宮が中の君を) よろづに契り慰めて、もろともに月をながめておはするほどなりけり。 [宿木四〇二頁]

m. (※匂宮) 「いま、いととく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と聞こえおきたまひて……。

[宿木四〇二頁]

n. (※中の君) おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄のほりて……。

[宿木四〇四頁]

o. (※老人ども) 今は入らせたまひぬ。月見るは忌みはべるものを。

結婚当夜、六条院方では、匂宮の来訪を今か今かと待ち焦がれている(j)。夕霧は十六夜の月が容赦なくさしのぼって来るのも忌ま忌ましく、とうとう息子の頭中将をして、匂宮に「大空の月でさえさし入ってくる我が家に、宵を過ぎて

もなぜあなたはお越しくださらないのでしょうか」(k)と申し上げるのであった。一方、中の君とともに二条院で月を眺めていた匂宮は(一)それもまた不憫と思い、「ひとり月な見たまひそ」(m)との言葉を中の君に残して六条院に赴く。一人残された中の君はその月がまるで「姨捨山」の月にも見えて(n)、一人嘆きに沈む。それを老女房たちが「月は忌むもの」(o)と咎め立てるのであった。

ここでは十六夜は、単に時間の経過を表すだけではなく、見る者の思惑をさまざまに抱え込んだものとして描かれている。つまり、この「月」は、それをへ忌ま忌ましく見上げる夕霧と、あるいはへ忌むものとして感じている匂宮や老女房の姿を、俗世間(現実)の(象徴)として描き出しているのである。一方、そんな現実を文字どおりへ照らし出す月に對して、悲嘆に沈む中の君の見るそれは「姨捨」の孤独な月である。ここに描かれた「月」は、そんな中の君の孤独をより鮮明に照らし出すための一つの(方法)として、ここに据えられているのである。

#### 四 おわりに

中の君自身の独詠歌、女房たち、語り手、月等を通して描かれたのは、中の君の切実な嘆き、孤独であった。そしてそれは一方で、中の君が厳しい(現実)と對峙していこうとする(孤高)な姿を映し出している。否、少なくとも(物語)は、そうした中の君の姿を描き出そうとしているのだと言えよう。

大君は薫を拒み続け、結局はその(純愛)を守り通すために自ら死を選んだ。新編全集は大君のそうした姿を、「頑ななまでの孤高の姿」〔総角二五六頁(頭注)〕と評している。しかし、大君とはまた違った意味で、ここに描かれた中の君の姿も(孤高)と呼ぶのにふさわしいであろう。つまり、大君とはまた違った壮絶な生きざまが、ここには描かれているのである。

中の君は、孤高な（死）ではなく、俗世において（生き続ける）という道を選んだ。それは一見相反する生き方のように見えるが、しかしここに描かれた（孤高）な精神は、明らかに大君のそれを受け継いでいる。つまり中の君は、大君と本質的に同じ主題を担わされ、物語を生き抜く存在なのである。

注

- (1) 「源氏物語」の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集（以下「新編全集」、阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男校注・訳 小学館）に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。
- (2) 「古今和歌集全評釈（下）」（竹岡正夫著 昭55・11 右文書院）
- (3) 新編全集「うつほ物語①」（中野幸一校注・訳 平11・6）
- (4) 田中仁「椎の葉の音——「源氏物語」宿木巻——」（國語國文 第五十九卷第十号—六七四号— 平2 京都大学文学部国語学国文学研究室）
- (5) 「源氏物語評釈」第十一卷（玉上琢弥著 昭42・11 角川書店）
- (6) 新潮日本古典集成「源氏物語六」（石田讓二・清水好子校注 昭57・5 新潮社）
- (7) 新日本古典文学大系（以下「新大系」）、「源氏物語五」柳井滋 室伏信助 大朝雄二 鈴木日出男 藤井貞和 今西祐一郎校注 平9・3 岩波書店）
- (8) 新大系「後撰和歌集」（片桐洋一校注 平2・4）
- (9) 新編全集「源氏物語⑤」（二九四頁頭注一六）
- (10) 新編全集「源氏物語⑤」四〇四頁頭注六には、「宇治の荒涼の自然に対比しながら、秋風の景に絶望的な心を託した歌」とある。

（博士後期課程一年）